

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4392600195		
法人名	社会福祉法人光進会		
事業所名	グループホーム第二光喜園		
所在地	熊本県菊池郡大津町大字室1724-2		
自己評価作成日	令和4年6月1日	評価結果市町村受理日	令和4年7月19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和4年6月20日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

令和3年3月25日に開設した事業所です。開設当初、職員研修で決めた7つの行動指針を掲げ、利用者様のペースに合わせたケアを行っている。地域に根付いた施設になるように地域との協力や多職種連携に力を入れており、訪問診療、訪問歯科、訪問薬剤師、訪問マッサージ、訪問整体との連携を行っている。また、グループ内事業所の協力で、デイケアよりPT、特養より管理栄養士が入りしケアにあたっている。理念を「地域とともに チームでつくる 生きがいある それぞれの居場所」とし、利用者様が生きがい・やりがいをもって、日々生活していけるように園芸やフラワーアレンジメント、調理等それぞれが得意とする分野でお手伝いをしていただいている。また、利用者のできない部分でなく、できる部分に着目し、手を出しすぎることなく、利用者様と職員がお互いに助けあい第二光喜園がそれぞれの居場所になるように支援している。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設した間もないホームではあるが、先行する同法人グループホームを経験した管理者のもと、行動指針7項目に職員のケア姿勢を謳い、入居者の残存能力・得意分野を生かした日常や自由な生活ぶり、生きがいややりがいの有る生活は生き生きとし、入居者のみならず保育園への雑巾提供となる等その成果が表われている。「地域とともに…」とする理念の実現に向け、高校生とのオンライン会議や地域にある他職種間連携としてチームとして協力し、町に有る事業所との連携を図っている過程にある。管理者を中心として、委員会活動の充実や、職員で協議した役割分担等言い合える関係性にあり、eラーニングによる講習やパーソン・センタードケアについての研修等志向を高くして臨むホームである。コロナ禍による外出への制限も有るなかで、ドライブや野菜の育成、おやつバイキング等笑顔ある暮らしを継続し、入居者と職員との1対1の半日外出等の提案も挙っており、入居者の日常の潤いとして大いに期待したい。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	当初、理念がなく職員研修で作った、7つの行動指針を共有し実践につなげている。最近、「地域とともに チームでつくる生きがいある それぞれの居場所」を理念とし、実践を行っている。	令和3年3月法人の中の2カ所目のグループホームとして開設したホームでは、まず行動指針を作成し、作成した理念は大津町の理念に則る等地域と共にあるホームとして具現化して示している。また、行動指針をケアに反映させている。第二光喜園通信に理念を載せることで啓発の一環としている。地域包括支援センターとの話し合い等地域密着型サービス事業所として高い認識を持ち、ユニット毎に年間目標を掲げ、行動指針の実践に意識を持ってケアに当たっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの関係があり、外出・外食などの機会がなく交流ができていない状況。近隣の高校とは、2度ほどオンライン交流会を開催している。	コロナ禍にあり、外に出ること制約があるが、高校とのオンライン会議を開催した事例がある。入居者と一緒に買物に出たり、外食支援等職員から提案も挙っている。	町にある事業所との連携やリハビリ特化型の事業所との相互研修等の構想もあり、感染症に目処が見えれば、地域・住民との繋がりも検討いただきたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の高校で認知症サポート養成講座(町からの依頼により)をオンラインで開催している。また、入居の申し込みや相談で来られた方に対し、施設での活動や認知症についてご説明を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	法人内の喜寿園、光喜園と合同で開催する予定だが、コロナもあり、郵送での対応となっている。	書面開催として(令和3月から11月まで)、入居者数や待機状況、行事や事故件数・ヒヤリハット件数の他、職員で作上げた行動指針の7項目等を発信している。コロナ感染症対策により書面での報告としていたが、対面での運営推進会議開催を検討する意向や、ヒヤリハットや事故等について詳細に説明する機会としていく等の構想もある。	メンバー構成は充実し(家族・行政・地域包括支援センター・薬局・協力医療機関・認知症対応デイ・高校・グループ内施設等)、報告書は郵送されており、対面での意見交換により、委員からの意見を収集する等運営推進会議を効果的に活用できるよう今後に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村の担当者とは、今後のケアの相談を行ったりと連絡している。密な連絡とまでとはいかないが、メールや電話などでのやり取りも行っている。	グループホーム立上げから行政と連携する等緊密に連絡を取り合い、メールによるコロナ感染症関係情報を予防対策に反映させている。行政からの依頼による認知症サポーター養成研修(オンライン)開催等に協力している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ユニットごとの定期的な勉強会を行い、リスクを考えるあまり、目的が手段にならないようにケアの検討などを行っている。	身体拘束・リスクマネジメントとして話し合いを行うとともに、不適切ケアについてのアンケート調査を行っている。また、ユニット毎に勉強会を開催し、具体的な行為などを学んでいる。転倒防止として、人感センサーによる見守り等家族に説明している。外出傾向の高い入居者対応として外には監視カメラを設け、GPSの使用される入居者等もおられる。	帰宅願望時の対応として目線を合わせ話を傾聴することなどをミーティングにより共有している。入居者の外出傾向等も把握されており、今後も所在確認を徹底いただきたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待についても勉強会を開催し、無理しない介護やチームとしての他の職員にお願いしやすい環境づくりに努め、介護職員が孤独にならない様に行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護については勉強会を開催している。成年後見人制度については今後勉強会を行う予定となっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は、契約内容はもちろんのこと介護報酬やリスクについての説明も行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	御家族との面談時やお電話の際に要望などについて話を伺っている。今後、意見箱等の設置を検討している。	家族には訪問時や電話等により意見や要望を聞き取りしており、家族の意見等ケアに反映させたいとしている。”第2光喜園通信”や健康面・行事・状況変更についての対応等の発信は、コロナ禍による訪問を控える家族の不安解消に努めている。	コロナ感染症の中での開設であり、家族からの意見の徴集方法等検討いただき、忌憚りの無い意見をケアサービスに反映されるよう期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個人面談やユニット会議などを利用し、その方の得意分野ややりたい介護を聞き出し、サポート行いながら提案の実現に繋がる様活動している。	管理者は職員の幸福感ややりがい等とともに認められる事が重要であると認識し、個別面談やミーティング等により職員の意見や提案を聞き取りしている。更に、委員会活動も充実し、身体拘束・虐待防止・事故防止委員会、広報・防災等の役割分担も全員で協議する等言い合える関係性を整えている。eラーニングでの講習や、パーソン・センタードケアを学ぶ等モチベーションを高くしたホームである。法人全体での定例会議(週1)、合同会議や求人プロジェクトとして主任での話し合いにより離職しない職場を目指している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考査や目標管理の面接を行い、昇給の検討や、個々のやりがいにつながる研修を紹介するなど、モチベーションアップにつなげている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護未経験や認知症未経験職員に関しては、事業所において認知症サポート養成講座を開催。外部研修に関しては、貸付制度による研修受講を推し進めている。また、eラーニングでパソコンにより、講習できる機会を増やしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	現在、コロナでストップしているが、近隣の施設との相互派遣研修を計画している。		
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所検討の訪問の際、ご本人様と話し、性格や生活歴を聞いたうえで、本人の要望や困りごとを聞き、不安な要素を消す努力を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込みの時点で、ご家族様とゆっくり話を行っている。入居の時点では、ご家庭の様子や今後の方向性について話している。身体拘束をしないので、当然いろいろなリスクがあることなども、すべて話して信頼関係を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	訪問の際、ご家族及び利用者の状況・お話しや表情、現在のサービス利用の状況を鑑みて、利用者様が現在どこで暮らすことが幸せなのかを考え対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員には、利用者を認知症と思わず、まずは「人」ということを考え行動するように話している。一家族と同じように対等の立場で接するように話している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人だけでなく、家族のアセスメントを取りながら、家族関係の見極めを行っている。一方的に面会に来ない家族に対し、面会に来るように言うのではなく、関係性を見極めたうえで、来やすい環境づくりに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の調査を行う上で、買い物に行かれていたところや遊びに行かれていたところなど、買い物支援の際にお連れするように計画しているが、コロナ状況で行えていない。	入居者のこれまでの生活歴や趣味等を把握したり、町の冊子(私の人生)を活用し家族に聞きとりしている。また、入居者との日々の会話の中で把握した案件を実現させている。(ドラム・フラワーアレンジメント・俳句・書道等)馴染みの場への外出が難しい中で、今出来る支援に努めている。更に、雑巾縫いに励まれたその成果は保育園への提供として生かされている。携帯電話を持ち、家族と連絡を取り合う入居者もおられる。	車中からのつつじ見学等が支援されており、コロナ感染症が収束すれば、馴染みの場所への外出等も検討いただきたい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	常に利用者の行動や言動に留意し、職員が入り過ぎない様に努めている。状況次第で場の空気を作るような接し方に心がけることで、共同生活の構築に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居相談に来られた利用者様ご家族などは、居宅ケアマネを含め現状の把握を行い、相談やフォローに努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者様の自主性を大切にしている。勤務の時間帯も利用者に合わせて、その都度、検討を行っている。又、生活歴を重視し利用者様が出来なくなっている事に傷つけないよう配慮しながら、希望を聞き出して、慎重に検討行っている。	日々の生活の中で入居者の意向等を聞き取りしたり、入居者同士の会話の中から把握している。また、入浴時をコミュニケーションツールとして思いを引き出し、選択肢を投げかける等自己決定する機会を設けている。職員は非言語的コミュニケーション能力アップや目線での話しかけ、傾聴する姿勢も持ち、表情や顔色等の変化等も観察しながら本人の思いに寄り添い、主体的な生活になるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご利用者の過去のサービスの使用状況などを聞き出し、必要時は過去の利用施設に問い合わせ状況の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の状況や今できることなど、利用者や傷つけないように配慮しながら、出来ることはして頂くなどの役割を見出しながらケア行っている。 利用者のやりがい作りに努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	現在の認知症の症状を探りながら、ケアに当たっていき、本人・ご家族との関係性も考慮しながら、介護計画の作成に当たっている。	本人・家族の意向をもとにしたプランは健康状態の維持に向けた支援や担当者会議(本人・家族・ケアマネジャー・介護職員等の参加)により生活の希望や体調管理等を話し合っている。毎月のモニタリングにより変化があれば見直している。また、退院に向けた話し合いにより必要であれば新たなプランとする等現状に即したプランを作成している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者様の日々の様子は、職員の思いは入れず、ありのまま(利用者が言ったそのまの言葉)で記録するように指導している。重要なことは、申し送りなどを行い、職員の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご家族や利用者からのご要望は、取り入れ検討し、出来るところから始めるように心がけている。又、ご入院の利用者様が出た場合は、居室を短期入居として活用している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の学校関係と協働しオンラインによるイベントやレクリエーション活動を行っている。今後、地域密着型の施設として、地域に何が出来るか検討して行く		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診に関しては、ADLの低下もあり、ほとんどのご家族が訪問診療を利用されている。	地域の医療機関や隣接する関連医療機関をかかりつけ医とし、本人・家族の希望や身体状況に応じ訪問診療や受診に出向いている。受診は家族が困難な場合は職員が送迎や家族と同席等を含め、支援している。歯科は全員が訪問診療による歯科チェックや必要に応じた治療が行われている。職員は日頃の関わりの中で異常の早期発見に努める他、毎日のバイタルチェックや週1回パルスオキシメーター測定を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	現在、事業所に看護師2名、看護職員2名が在職している。日々の健康チェックなどは介護職員が行っているが、様子の変化などは看護職員に報告し、必要に応じて医師との連絡調整を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院期間中に安心して治療ができるように、短期入居を利用し、退院後の居場所の確保に努めている。入院に関しては、病院の地域連携室と調整を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時にご説明行う。 重度化した場合やそうなる恐れがある場合は、ご家族に連絡し、十分なリスク説明を行った後、今後のご家族希望をお伺いしている。	契約時に重度化・終末期支援に関する指針とリスクについて説明し、意向などを無理のない範囲で聞き取り、事前調査書に記している。家族の殆どが「まだよくわからない」と回答されており、入居後は担当者会議の中で聞き取りしている。終末期支援に関する研修は開設時と今後も予定されており、管理者は本人・家族の意向も踏まえながら、可能な限りホームでの最終支援に取り組みたいとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	施設勉強会で急変時の対応及び事故発生時の連絡系統などの勉強会を行っている。		
35	(13)	○災害対策  火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災避難訓練は行っているが、地震や水害想定訓練は行っていない。現在の施設の場所は、地震や水害時の避難退避所として適切であるため、今後その想定で対策計画する予定。又、現在のところ地域消防団が参加しての避難訓練は未実施	昨年度3月に2回、避難訓練を行っており、うち1回は消防署員の協力を得、入居者も参加して実施されている。地震や水害を想定した訓練は行われておらず、今後はホームが災害時の避難場所として適切であるため、それらを含めた計画を予定している。消防団の参加を得た訓練は現在の所行われていないが、敷地内には多くの関連施設や事業所があり、法人全体の訓練や協力体制について更に強固なものにしていきたいとしている。	備蓄については今後の課題としており、早急な取組が期待される。また、年2回の計画的な訓練やチェック表を活用したホーム内外の安全確認に期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	認知症の勉強会を行い、本人の自尊心を傷つけない対応には、特に気を付けるように職員には話を行っている。認知症の前に一人の人だと言うことを徹底している。	全職員が認知症を理解し、個々を尊重した支援にあたることを共有している。呼称は苗字を基本としているが、同姓など状況に応じた名前でも対応している。管理者は守秘義務の徹底をはじめ、入居者の要望を否定しない対応(昨日入浴したから今日は入浴日ではないと言ってしまうなど)を日々の業務の中で周知している。写真の使用や居室の名前表示、行事の際の撮影及び写真の掲示など入居者及び家族の要望を聞き取りして対応し、入室時のノックを徹底している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	すべての行動は、ご本人に確認してから行うように心がけている。認知症により判断が難しそうな場合は、2択にして自己決定を促すなどの工夫を行っている。認知症により判断に時間がかかる事もあるので、待つことも大切である事を指導している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	なるべくその方のペースに合わせた介護を行っている。施設内の行動については、自由に行動して頂いている。一部、施設外の散歩に行きたい利用者に対し、職員が少ない時は、待つ頂く事はあります。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	女性の利用者などは、化粧をされたり、お洋服を選ばれたりとおしゃれを気にされていると思います。整容などの声掛けは、行いますが、基本ご本人様にして頂いています。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者と一緒に食事作りをしたり、食べたい物を聞き、時にはテイクアウトを行う事もあり。家庭的な雰囲気での食事に努めている。	開設当初から各ユニットを一軒の家と捉え、献立や食材の準備、調理をそれぞれで行っていたが、現在、2丁目ユニットは職員配置の点から夕食の副菜一品を調理済みの物を利用している。おせちやひな祭りなどの行事食、おやつバイキングなど工夫し、日々の食事は法人管理栄養士による献立のアドバイスも受けている。入居者は野菜の下ごしらえや配膳、片付けなどの他、菜園野菜の収穫などに取り組まれている。訪問当日も「ピーマン採ってくるな」「ピーマン何に使うね」など、入居者同士のやり取りからホームの日常が伝わってきた。	現在、職員は持参した弁当などを食べているが、味や量、入居者の思いを共有するためにも、同じものを1名でも摂る事が出来ないか検討されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分摂取量のチェックを行い、少ないと思われる利用者様に関しては、本人が好む飲み物で対応している。野菜などや栄養のバランスには気を使っております。利用者の嗜好も頭に入れ、時にはご自分のお好きな物の提供をすることもあります。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	基本は、本人さんに声掛けし、歯磨きをしていただいています。難しい方に関しては、一部お手伝いをすることもあります。訪問歯科により、半年に1回の口腔内検査も実施しております。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	その方々に合ったタイミングでの声掛けを行い、トイレ誘導を行っている。トイレでの排泄を機能訓練の一環と考え、出来る部分を引き出せるように介護を行っている。なるべくオムツは使用することなくケアにあたっている。	排泄を機能訓練の一環と捉え、できる部分を引き出すことや、個々に応じた声掛け、誘導によりトイレでの排泄を基本に支援している。外出時はリハビリパンツの使用であるが、日中は殆どの方が布パンツで過ごされている。夜間も個別対応に努めており、夜のみオムツの支援や、昼夜ポータブルトイレを使用される方のトイレは、洗浄や日光干しにより清潔に管理している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝のヨーグルト提供やその方にあつた食事の工夫や運動等を取り入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそつた支援をしている	基本、利用者様の入りたいときに入浴しているが、入れられない利用者様もいるため、大まかな日程を作っている。ただし、昨日は言ったからや今日は入浴日でないなどは言わないようにしている。また、コミュニケーションツールとし入浴を活用している。	現在、設置された機械浴を使用される方が2名おられるが、初めから機械浴に頼らずできる限り一般浴として湯船に浸かる事を大切にしている。温泉が引かれた浴槽で、午前・午後に関2～3回の入浴を基本としているが、毎日入られる方もおられる。職員は安全に配慮しながら1対1の時間を楽しんでもらっており、入浴後の水分補給も徹底している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	基本、寝たいときに寝ていただくスタイルをとっている。利用者の状況に応じて、昼寝の時間を設けるなどの対応を行う。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬については、薬情カルテを訪問薬剤師さんが毎回更新しており、職員はそれを確認して、状況の変化などに気を付けている。薬局との連携は密に取れており、新しい薬が追加になった時は、どこに気を付けたらよいかを確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者それぞれの役割を見出せるように努力を行っている。昔されていたことでも、現在どこまでできるかを調査しながら、本人が傷つく事がないように役割を見つけ出している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本人さんが外に出たいというときは、基本職員はついていだけで、行先は利用者にお任せしている。月1回外出を計画していきたいが、コロナの影響もあり、現在は数人でのドライブなどを行っている現状。	散歩を兼ねて敷地内に咲く花を見たり、野菜の収穫などを楽しんでいる。感染症の収束が見えず、入居者全員での外出や家族も一緒に外出する機会は困難な状況にあるが、数人でドライブに出かけ、周囲の状況により車から降りて外気に触れるようにしている。職員は外出に代わるホーム内での楽しみ事を企画したり、ユーチューブを活用して音楽や国内外の名所などを流し、旅気分を味わえるようにしている。	入居者の思いを察し、マンツーマンでのドライブなど職員から提案が出されている。地域には花の名所や外食先など楽しめる場所も多く、今後ふるさと訪問なども含め、個別外出の実現が期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族に同意書を頂き、3000円までご自分で保管できる体制を作っている。コロナが少し落ち着いていた時期には、パンの訪問販売などで、買い物支援を行っていたが、現在は行っていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者様が携帯電話を持たれている方もいる。 年賀状は、施設からとは別に利用者様よりご家族あてに書いていただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に出来るだけ私物を持ってきていただけるようにお話している。又、利用者の状況を見ながら、ご家族と相談の上居室の工夫など行っている。	玄関から回廊式のホームは、それぞれのユニットが入居者の状況に配慮した個性を生かせる環境を整備している。感染症対策として換気や掃除、消毒など定期的実施し、ほうきと塵取りをもって職員と一緒にホーム内の床掃除を日課とされる入居者の姿も見られた。また、趣味の活動として入居者が作った生花アレンジは、玄関やリビング、洗面台などに飾られている。イベント時はリビングの戸を開放し、一つのホールにして賑やかな時間を共に過ごし、その取組は“第2光喜園通信”への記載により家族に発信している。	リビングの壁面制作には入居者も一緒に取り組んでおり、今後も季節感のある作品が掲示されていくことを期待したい。雨天時はホーム内に洗濯物を干す機会も多いと思われるが、下着類については目隠しをするなど配慮が必要と思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ユニット内では、思い思いに過ごされる事で、ご自分の居場所の提供を行っている。また、利用者同士で、話しをされているときなどは、関係性を見極めながら、必要なときに間に入るなどの対応を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は、火気や動物の持ち込み以外は、何でも持ってきていただけるように話している。私物に囲まれ心穏やかに生活して頂け得るように配慮している。	居室には家にある使い慣れた物を持ち込み、自分の部屋らしくなるようにして欲しいことを伝えている。家族はどのようなものが良いか等尋ねられる事も多く、入居後の本人の様子から職員がアドバイスや一緒に検討している。衣類をはじめ、季節に応じた必要な寝具やテレビ、CDプレーヤーで好きな音楽を楽しまれる方もおられる。数名の方はテレビを持ち込まれているが、殆どの方が自室よりリビングの共有テレビを他の入居者と楽しめるようである。	感染症への対応から、現在持参された衣替えの品は職員が入れ替えを行っている。今後も居室の状況を家族と共有しながら、本人らしい部屋となるよう努めていかれる事を期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者それぞれの危険認知面などを理解したうえで、出来ることをして頂き、自立した生活が送れるように支援している。職員は、出来ない部分の一部を介助するのみで、しすぎないように気を付けている。また、利用者の行動を見極め、テーブルの配置やソファの配置をその都度変更することで、安全な空間を提供している。		